
君の手

印殷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の手

【著者名】

NZマーク

【作者名】 印殿

【あらすじ】

自分のことを相手が好きなんだと気がついていない女の子が、ある日から相手の気持ちを垣間見るようになつて・・・。

第1話毎朝

すがすがしく晴れた9月の空。吸い込まれてしまいそうな蒼い空。左右を同じ学校の生徒が走っていく。……びりして急ぐんだろう。まだ間に合ひのに……

上を向きながら歩いていく中一の少女。豊根幸（とねさち）毎日、遅刻ぎりぎりの常連である。今日も気持ちよく学校に向かって歩いていく。

「そろそろかな……」

バンつと心地よい刺激が背中を駆け抜ける。……來た……

・・・

「お前、またここ歩いてんのかよ。また遅刻するぞ？」

後ろから幸の背中を叩いた同じクラスの少年。朝河智紀（あさかわともり）。毎朝、遅刻ぎりぎりの幸の後からやつてくる、遅刻の常連2号。

「ほらつ。また遅れる。……走れ……」

智紀は幸の手を取り走り出した。

第1話毎朝（後書き）

初投稿で、いびつなところが多くあります。今後ともよろしくお願
いいたします！！

第2話涙の意味

9月。秋です。私は曾根幸（そねさち）は、文化祭のプロジェクトリーダーです。毎日、5・6時間目は文化祭準備です。・・・・・・確かに、やりがいはあるんです。やつてて、“ああ、私が作ってる”って感じするんです。でも、なんだか違つ気がして。・・・・・あ、チャイム鳴り出しました。はあ。とりあえず、今日も終わりです。疲れた。

幸は、重い足取りで教室へ戻った。・・・・やつている人は楽しいのかも知れない。自分の権利ばかり要求して、楽しい事をわいわいやつてれば良いんだから。でも、私は何なのだろう。他人が要求してきたことまで断つて、いいものを作り上げようとする私は間違いなのだろうか・・・・。幸の胸の中はそんな事で一杯だつた。・・・・何故か、涙が出た。私は間違つていないと思つてゐるのに。正しい事をやつてゐるつもりなのに。・・・・どうして自分のことしか考えられないの？自分たちがわいわい楽しくやつてゐる裏で、誰かが傷ついてるんぢやないの？どうして、気がつかないの？・・・・・と、最後に自分が幸は恨めしくなつた。

・・・そんな漠然としたコトバなんていらない。聞きたくも無い。
私に話しかけないで・・・・・・・・・。幸はただ、泣くしかなかつた。変な同情なんにしてほしくなかつた。本氣で自分のことだけを考えてコトバを放つてくれる人がほしかつた。・・・・ふわっと背中に広がる暖かさ。小さい割りにずしつとくる優しい重さ。智紀（とものり）が背中合わせに寄りかかつってきた。

・・・・・あは・・・・・

「…………死ね…………」

「…………どうした…………？」

智紀はそれだけを聞くと、ひつきりなしにしゃくりあげる幸の手を引き、水のみ場へ行つた。

ただ泣き続けるだけの幸の横に立つてゐるだけだが、その無言の優しさが嬉しかつた。思い起こせば、ずっと昔から智紀に幸は助けられてきた。幼稚園で、人気のあつた智紀と毎朝登園したり、お弁当を食べたりしていてクラスの女子全員を敵に回したときも守つてくれた。小学校に上がってからも、やっぱり人気のある智紀と登校したりするだけで学年の女子からいじめられた。そのときも守つてくれた。……何度も何度も。いつもいつも。一番近くにいて、助けてくれたのは智紀だった。

「…………落ち着いた？」

心に落ちてくる、優しい声。

「…………疲れたんだろ？」

落ちてはしみ込む、温かい音。自然に解ける心の不安。辛苦。

「ありがとう。……また、助けられちゃつた……。いつも迷惑かけて、ゴメンね」

いつもは出ないのに、何故か素直に出た言葉。いえなかつたこの口トバ。

とう…………

「今日は素直なんだな…………。いつも強がるくせに」

「べ、別に強がつてる訳じや…………」

「甘えて良いんだぞ？つらかつたら言つて。ね」

私より少し小さな体で抱きしめる智紀。その腕は小さく震えていた。

「あ、え…………どうしたの？もしかして、泣いてるの？」

智紀は熱い息を吐くと、フルフル首を振りパツと離れた。

「泣く分けないだろ。ばーか。教室戻るぞ」

とへらつと笑つた。

第3話 | つの心

月日が経つのは早く、気がつくともう文化祭前日。最終準備に追われ続けている幸。自分の仕事をこなしていきながら驚異的な統率力でプロジェクトメンバー全員に的確な指示を飛ばしていた。・・・

「つぐあ――――――！終わったああ――」

文化祭の準備も終わり、幸は大きく伸びをして目を閉じた。・・・長かったこの2ヶ月。あつといつ間に過ぎたわ。色々な事、あつたわね。あ、そう言えば、智に助けられたなあ・・・。あの時、智いつもより優しかった。何でだろつ・・・。なんか時々優しくなるのよね。しかも気持ち悪いくらいに。だって、この前なんて抱きしめられたわよね。あ、ずっと前なんかおでこにチューされたんだっけ・・・。

ふと目を開けると、ドアップで智紀の顔。

「ひひイ。つ智。いつから覗いてたの？」

智紀は幸の横に座ると、ニッと笑いながら幸の手を取り、「田つぶつたときから

と言った。幸はにこにこほくほくしている智紀を見て、フツと苦笑した。今まで何度もこの笑顔に癒されてきた事だろう。でも、笑顔だけじゃ足りなかつた。つんつんと智紀の柔らかい頬を触つた。

「いやああ・・・。癒し。超気持ちいい」

と言つていると、智紀はすくつと立ち上がり、「触るなよ。・・・。気安く・・・・・」

とボソッと言つた。幸は聞き取れず、聞き返したが別に、とあしらわれた。智紀は、

「あ、そうだ。文化祭、一緒に回らない?」

と聞いた。幸は、

「うん。当たり前でしょ。私、智と一緒にじやないと迷子になっちゃ

うもん」

と言つた。智紀は、複雑な胸中を押さえ込みながら、「バカだな。ほんと。・・・・・じゃあ、また明日な」と言つて部活に向かつた。

幸は一連の智紀の若干不自然な行動を見て、どうしたんだ？と思つたが、最後のいつもの口調に一安心した。

第4話般若軍

がやがやと混み合つ校舎。人だかりであふれ、今にもはちきれそうな教室。そう。いよいよやつてきた文化祭当日です。私のチームは、戦争について考える、です。生徒よりは、お年より受けしています。誰に受けようと、見てもらえると嬉しいです。

幸は自由時間を迎えると、教室の前で智紀を待つた。……遅い。いつもは時間にルーズではないのに。

「智、どうしたんだろう……」

そのときである。階段から女子の悲鳴が大量の足音とともに聞こえてきたのは。

「ん……。何？」

ふと、視線を向けたその先には、劇で王子様の服を着た智紀が女子に取り囲まれていた。きやーという鋭い悲鳴や、ないでいる人。最悪、失神してしまったような人までいた。

「うわ。すご……」

幸は傍観者の振りをして、おうおう、と眺めていた。智紀はその良く知る傍観者の視線に気がつき、すまなさそうな顔をしたが、その傍観者は、よつ、と手をあげた。智紀は助けてはくれない事を悟り、自力での脱出を試み始めた。おもむろに、穿いていた白い手袋を取ると、思いっきり遠くに投げた。女子の山は、面白いぐらいそっちへ走った。自力での脱出に成功した智紀はいわいそと幸のところへ行つた。

「ごめん。幸。まさかこんな事になるとは……」

と言つた。が当の本人は、

「やあやあ人気者。君もさぞ、大変だろうねえ」

とまるで他人事のように言つた。そして、智紀の手をとると、

「王子様はお姫様をエスコートしなくちゃいけないのよ？」

と言つた。智紀は、ふと息をつくと幸の手をきゅっと握り、

「わかつてゐるよ。俺のお姫様・・・・・」

と言つた。幸はきょとんとしながら、

「あ、え。俺のお姫様とか。何言つちやてるの。そ、そんな事言わ
れたら・・・・・」

と言い詰まつた。智紀は幸をまじめな顔で見つめ、
「そんな事言われたら、何?」

と、聞いた。幸は頬を赤くしながら、目を泳がせ、
「智が私のこと好きなのかと・・・・・思つじゃな、い・・・・

と言つた。智紀はまじめな顔で見つめたままだつた。

「・・・・・幸・・・・・俺・・・・・」

と何かを言いかけた瞬間、

「いたわ! ! あそこよ! !

と先ほどの女子の山が般若のよひつな形相で追いかけてきた。智紀は、
がっくり肩を落とすと、

「走るぞ! !

と智紀は幸の手を掴み走り出した。

第5話 ひっくり人形

智紀と過ごす時間は楽しくて。どんどん時間が過ぎていった。文化祭も、とうとうファイナーレを迎えた。最高潮に盛り上がっていた。最後のプログラムである、生徒会役員によるエンディング。今年のテーマは「いのち」

とても重いテーマに生徒会役員は果敢に挑み、見事に成功させた。満員の体育館は拍手に包まれた。生徒会役員は惜しみない全校生徒、教職員、保護者からの拍手にステージ上で涙した。

興奮冷めやらぬ幸は智紀と家へ向かって歩いていた。

「最後、生徒会エンディング。超感動したあ！！ねえ、智紀？」

幸はルンルン弾みながら智紀に聞いた。智紀は無言でうなずいた。幸は一人でペチャクチャペチャクチャ話していた。智紀は何かを考えているのか、無言でうんうんとうなずいていた。聞いているのかいないのか、それさえもわからなかつた。

「…………でね…………。智紀聞いてる？」

「こつくり。

「智紀ばか？」

「こつくり。

「智紀聞いてないでしょ？」

「こつくり。

「どうちよ、智紀」

こつくり。智紀はこつくりこつくりうなずくだけだった。幸ははあつと大きなため息をつき、

「智紀つ――！」

と叫んだ。

「うわっ…………。何だよ、いきなり！」

智紀はきんきんしている耳を押さえた。

「…………どうしたの？ 智紀…………。何考えてるの？」

智紀は見つめる幸の視線から逃げるよつに一步前に出た。幸は、智紀の手首をつかみ、引き止めた。智紀は何も言わず立ち止まつた。

・・・・・一人は沈黙に包まれた。幸は、沈黙を破つた。

「あつ、あのさあ、さつきなんか言おうとしてたしょ？ 何て言おうとしたの？」

幸は智紀の前に立ち聞いた。智紀はしばらく押し黙つた後、

「俺は、俺はっ・・・・・」

とだけ言い、また押し黙つた。幸はムームと眉を寄せ、「俺は何？」

と聞いた。智紀はまたしてもこつくりうなずいた。

「もう！――こつくり人形じやわかんないよ！！」

幸は智紀の腕を揺さぶつた。智紀は幸の手を払い、「俺はこつくり人形じやない」

とぽつつり言つた。幸は苦笑しながら、

「そんな事わかつてゐわよ。例えよ？」

と言つた。智紀は、かすかに震え、

「俺はつ、俺はお前のことがつ・・・・・・好きなのにつ」と言い放ち走り去つた。

「智紀！――ちよつ・・・・・。どういつ意味よ・・・・・」

幸は一人取り残され、たつた一言“好きなのに”の深い意味にいなまれていた。

好きなのに。たつた一言の意味はひどく重く・・・・・・・・・・

一体あれはなんだつたのか。どういう意味だつたのだろう。意味は無いのだろうか。

好きなのに

言葉の意味は重く。

幸はあるの後から、遅刻組みの卒業をしていた。いつもの様に学校へ行つて、智紀に会うのが怖かつた。どういう顔をして話せばいいのか。むしろ、話さないほうがいいのではないか。

「あああああ！！！もう…！…どうすればいいの？！」

幸は授業中しかも、テスト中に突然叫んだ。周囲の冷たい視線が痛く、肩をすくめながらいそいそとテストへ集中した。

考えれば考えるほどわからなくなつていつた。言葉の意味も、智紀のことも、自分のことも。二人の関係は永遠にあのままだと思つていた幸は、あの言葉がなんなのか。幸はあんな一言で今まで積み重ねてきたものが、壊れるとは思つてもみなかつた。

「どうしたの？何か考えて」

一人ぽつぽつ歩いている幸に声をかけたのは、大親友の曾根山柚木（そねやまゆき）。中学生とは思えないくらい、艶っぽく色気のある女性だ。幸は、柚木に抱きつき、これまでの事を話した。柚木は幸の頭をよしよしと撫でた。柚木は、頭を傾け考へると、

「どういう意味か確かめたの？・・・・・確かめてないのに、一方的に避けるのはどうかと思うわ。彼だって、その発言の釈明をしたいと思ってるかもしれないし。・・・だから、一度しつかり話して御覧なさい？」

と言った。幸は「へんとうなずき、

「話してみる……けど、どうやって……」

と言った。最近、智紀とは全然話していないし、顔を合わせてもい
ない。きつかけが何も無いのだ。柚木はふうっと息をつくと、
「しょうがないわね。最近話していないから、きつかけ無いんでしょ
う。違う?」

と幸に問いかけた。何故、こんな事までわかってしまうのか。幸は
感心しながらうなずいた。

「よし、ここは私が一肌脱ぐか」

柚木は一言も言わず、私服のよう見える着崩した制服を直し、歩
いていった。

カリカリと言つシャープペンシルの音が教室に響いていた。智紀
は一人シャカシャカペンを走らせていた。

「・・・・智紀? 何してるの?」

柚木はゆっくり智紀の前に座り、たずねた。智紀は書いていた紙を
さりげなく隠し、

「別に・・・・・・。何しに来たの?」

と柚木に質問した。柚木はカシャン、と智紀のシャープペンシルを
落とした。智紀は、いいよ、とシャープペンシルを拾うために、か
がんだ。柚木は、「メンネ、と言いながら、さり気なく机の上から
紙を一枚、抜き取つた。すばやく文章に目を走らせるが、柚木は、
ふつと息をつき、元の場所に戻した。

「ごめんね。落として。・・・・ちよつと、用事思い出したわ。バ
イバイ」

「ん? ああ。じゃーな」

柚木は煙のように教室から出ると、クスッと笑つた。

いつもの笑い

柚木はまるで煙のように幸の家へ向かった。オートロック式の一般的なマンションのインターホンの番号を何箇所か叩いた。すると、

「柚木？あけるから。あがってきて」

と声がってきた。柚木は、はいはいと言つとエレベーターに乗り込み、7の数字を押した。

幸に部屋へ通されるといつもの様にいすに座つた。幸はあらかじめ用意しておいたグラスにオレンジジュースを注ぐと、柚木に差し出した。柚木の前に座ると、

「で、どうだつた？」

と唐突に聞いた。柚木はくすくす笑うと、

「…大丈夫じゃない？うん。そのうち、いい結果が出るでしょう」と占い師のように言つた。思いもよらぬ答えに幸は肩から力が抜けるのがわかつた。

「そんなこと、聞かなくてもわかってるんじゃないの？智がどう思つてるのか。一番知つてるのは幸だと思うよ。違う？智が一番長い時間一緒にいて、笑つたり、泣いたり…。いつも、一緒だつたのは幸でしょ？」

柚木は涙をこぼす幸の手を取り続けた。

「何をそんなに構えてたの？肩の力、抜いたら？自分の気持ち大切にしないと。ね。確かに、わたしが同じ立場だとしたら、元の関係を壊すのは怖い。だつて、それだけ時間かけてきたんだから、次日からまた修復できるとはおもわないし。でも、智も、幸も、構えすぎなの。ちょっとのリスクくらい気にしないで、素直に自分を表現したら？ね？」

穏やかな沈黙の後、幸は立ち上がつた。

「わたし、がんばってみる。…ありがとう。柚木」と言い残し、走つて出て行つた。

「どういたしまして」

柚木はくすり、と窓の外を眺めた。

舗道に落ちる影が長くなつてきた頃、幸は下校中の智紀を見つけた。

「智紀！…」

自分で驚くくらいの大きな声が出た時、智紀も振り向いた。

「幸…」

幸は上下する肩を落ち着かせながら、智紀の前に立つた。

「あのね、智紀…。私、今までずっと智紀が横にいて、当たり前だと思つてた。でも、智紀はみんなから好かれるのに、ずっと、私の側にいてくれるから、智紀に鈍感になつてた。だから、今までの私たちの関係を壊したくなかったの。だから、気にしないようにして、でも、気にしちやつて、だけど、智紀は相変わらずで、でも、私気づいたの。智紀のこと…！？」

「好きだ。幸のことが。幼馴染だからいつも一緒にいたんじゃない。…最初はそうだったのかもしれないけど、いつからか、幸を離したくなくなつたんだ。いつでも、幸の隣りにいたくなつて、でも、幸は相変わらずだから。言ひに言えなかつた。だから、もう一回、言つとく。幸、好きだよ」

智紀は幸を優しく抱きしめた。幸は溢れてくる涙を止めることができず、智紀の腕の中で泣いた。

「私も、智紀のこと、好きだよ」

赤々と燃える夕陽のもと、幸の心もたつぱりと満たされていった。

「じゃあ、これもいらないな」

智紀はポケットから封筒を取り出した。幸が封筒を手に取ると、

「最初で最後のラブレター」

と言つて、にへらつと笑つた。

こつもの笑い（後書き）

だらだらと本当に遅筆でした。最後までお付き合いでいただき有難う御座いました。これからも、明星院麗子を宜しくおねがいいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8551c/>

君の手

2010年10月9日02時00分発行